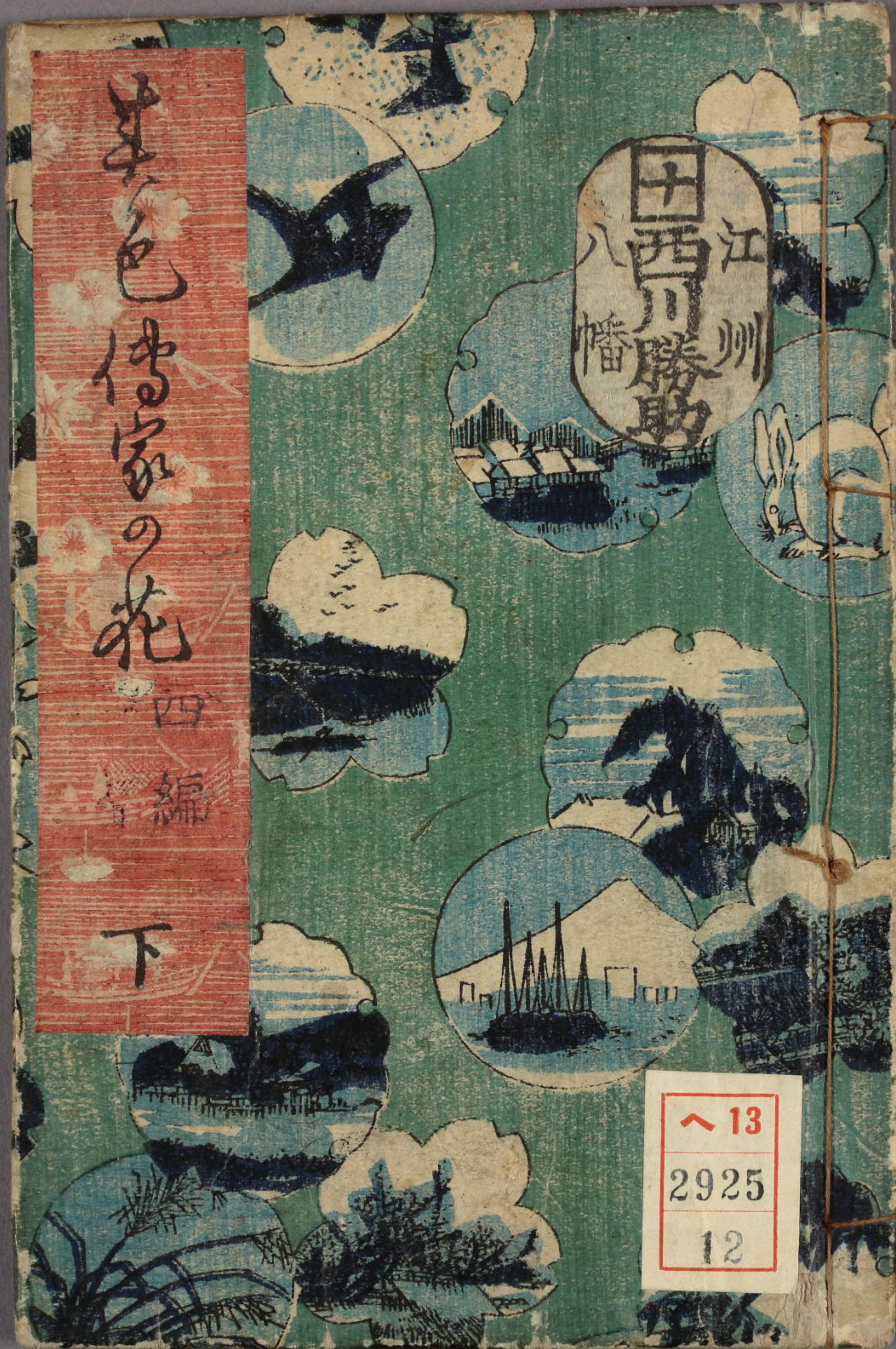




春色傳家の花巻之十二

江戸 爲永春水著

第廿三回

春をひきかへて 山崎の老屋 役目 山崎の老女 岩波と心を
 合せ 若殿 弥生と 助小 名を つけ 結腹を 切らす
 今より 八歳を 追拂ひ 又大 殿の 病を 是を
 理ふ 押込め 山崎の家を 押腹の さんと 年々
 種々 故何 居るし 小日 外を 荒れと 荒れが せし

昭和九年
 七月十八日
 晴

供は迎駕の武士小のりつけと金すーこれバ
あどろく香籠をドめ悪人どもはまの捕まえてお
さいませう。そのものこそ悪を以て候好地の上を
あへは供りーすー表ますーと大坂さぬの波
も軍ーくごさいませんう今晩はお川うまねど
むそふあまの宿の中場の別荘にお供をいーす
であざいませう 孫生 方のもを所へは極
理ぶやが香籠ごとね小籠を奪られ逃げ逃をま

松を孫生と助と思ふりサア清く助候いせうか
しく香籠めを夫が自る捕らひばあぬ 孫生
それと思へ遠ひくごさいませあく 清を智の武
士が香籠ふお籠を奪ひとれすを松みりい
ません香籠を連ぬりすーと六万く一は煙我で
あつてお孫生せんうのゆでございませマク 孫生
お任せ松がーすーコく たる代何はは機嫌を取
あいのぶあまさんにお側にお居あいのる ちよ 一ホニ ちる

何やせんときを採のそ詮方もあにそおし
後ハ知ねど女拭めくお前りせー一個の男
所陰よりーとろくーとおまの側へ拭きお星の光
お透ーんそ男ヲくそ嬢さん抱擁でも愛の
ろト云いそくおまの抱りせーがよき一幸いとあふ
あそおまそお細き声をあげまハい後抱ぶぞんト
おせんが抱擁切ふるぞうござのまそおまそお話あふ
そおおひがござのまそおおハ抱擁の癪があらう
そ

一足も歩られせんー何卒先へまへて連ふけ
そをい知しそあそろくー下さいまーヤとそ
とんごりご子係お前をとり進知いそそおまそ
でもお金と大愛ぶくけおが資負く連の人の
居あそる所まぐ送ろく進やせろト云ひつゝおまが
おまそを無理お資負く横たへ十町どよりも
まのろ後先見まろー喘息をホト吻つゝおまお
おの男コウお嬢さんらんあふおまのそ連の人お



進付ふのと云ふてゐるが遠くさうさう
お前の先ハ何処ぞアハイ妻庄の敷場ぞア
さうかと男イヤそりやア大變と遠知う敷場ま
ぶつ三里の余もありやうと申す今秋のうちふ
送らうと云ふと又金程時刻もつて
えとと連の人にも金も乏しいと云ふ今秋ハけの
住居がけを何ぞう一晩泊る秋の明のをはく
敷場へ送り居けと進やせうト云ふと云ふハ

尚感ぜし代ふ方もあるがそれとや
お前の毒でございませうと云ふと今晩ハお前さん
の所へ止痛あると云ふと云ふ男ヨシと云ふ
然う云ふを落付て居るが秋の明改め敷場へ送ら
進やせうト云ふと又六町は云ふ所も底も
句一最も煙一と云ふ家あり伴の男ハ妻をバけ家の
内へ伴ひ入る火種の炭を燃焼し煙火を
と云ふと云ふお妻ハ初めと云ふ男の顔をはくお

又三十八年ハ三十八六ろんが面長書く生下り目
 玉大きき色あき荒男あろのそあに家内の子
 も何とやろ落な味ろく思ふればいふ言ハ所調ふ
 男をよそくおさくあろろふふろ居るを男ハ又
 つ笑ひあぐろ男コウモ嬢さんそんあふきあを
 七居る子ハねえあの内ハいふより代ハ様もなげうひ
 み入ハ居るうろ足すも叔母ろやろりとあふせ
 ホニ今秋あふとあふろ生別男ろあふ酒がある

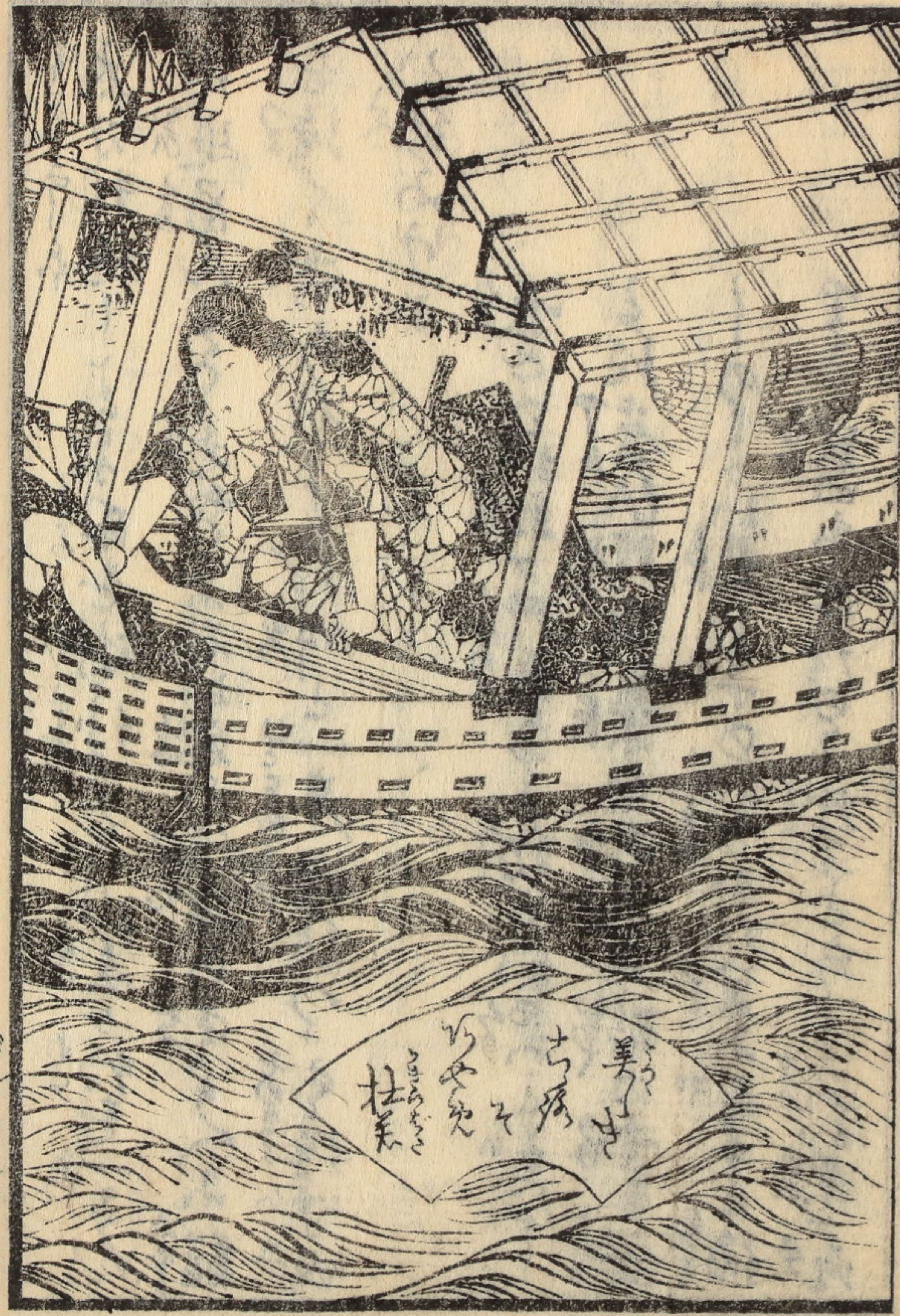
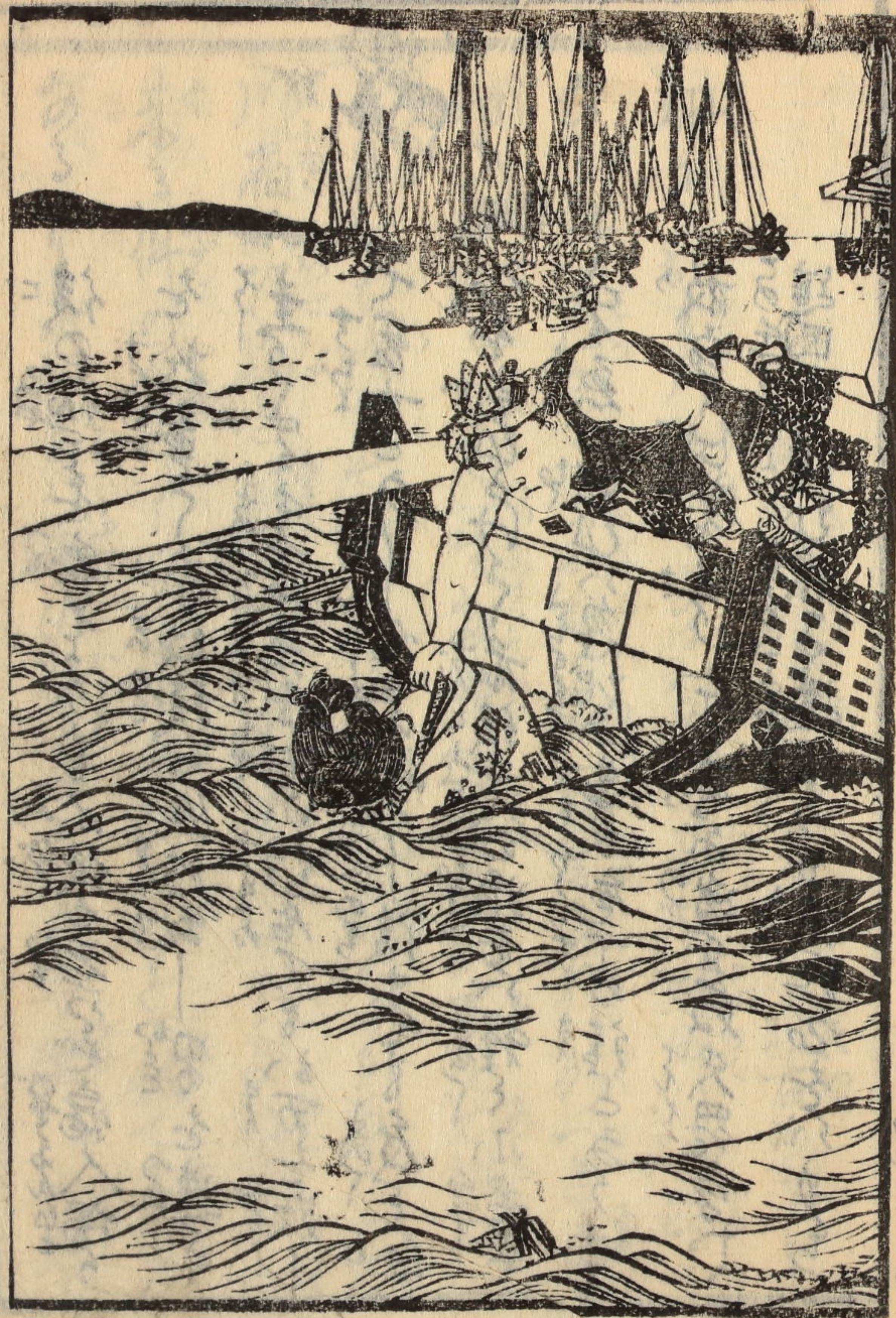
管^{くだ}ぞお赤^{あか}も一口吞^{のど}んで吐^{はき}とうきく一^{いち}ちろがゆト
 いひあぐ柳^{やなぎ}の隅^{すみ}より矢^や々^ざ陶^{たう}を下^{した}ーを倭^わ陶^{たう}の尻^{しり}
 を火^ひ种^{たち}の中^{うち}(さう)込^こめ柴^{さい}炭^{たん}のふまへに燭^{えん}をつける
 お妻^{つま}の顔^{かほ}をぢろりと見^みる男^{おとこ}ヤ。トキニ嬢^{あね}さん先^{まえ}
 刻^{とき}ハ暗^{くら}いのだお前^{まへ}の顔^{かほ}がよく足^そへあんが釣^つう四^よ六^む
 あぐると金^{かね}程^{ほど}英^{えい}一のものぞ何^{なん}でもお前^{まへ}が今^{いま}新^{あらた}
 達^{たち}といふ連^{れん}は情^{じやう}男^{おとこ}どもへエエ〜そんなもので
 ございせん男^{おとこ}コサけぬ小^{せう}説^{せつ}をもろがあるものち先^{まえ}

放し遊んどあるを抱とめく年ふうちふも女子の甲
斐るさ男の力小及むはバアエヨ〜と喚ぶも遠知ハ
世中の一ツ家ゆく隣といふもあうざれば強き付る
者もあく既ふあま荒男のゆいあふさきんとある
雨へ門の戸がらりと押めく住居へ強入るゝりりの女
年ハ八十を就〜とれども老婦不疑禁く居るあへふ
兄つけハ四十をうり〜とるやが矢度ふ男の後ろより
襦袢袖んふ〜し作し眼を送るせ声あう〜と

女房「子け世良が初老年をう〜と居あ〜と小娘を
し扱はんぞいけろき〜い女房の聲を踏付け
するも程があら〜もののゴアト大きな声あ〜とある
と〜と男もあう〜と大声あ〜と男「け將女ア〜と
とあう〜とあんまり利〜と風みけをき〜と女房の聲
を「あやア僕〜とあう〜とに船へでも出てけきやアこれ
な〜と出〜とけ〜とよくあま〜とアモ〜とが働きあう〜と
年中女房の腕をう〜と〜と居あ〜と大それた音を

叩きやアぐるなけりか災ある町不居く清元延和と
いふと時分やアはる小舎も満ち居るをそん
みふあふ入揚る仕舞とむりりか方を欺て唄
女小舎のふの代まぐを身おきられく揚句の
思ふらん田舎引見どのももんまを身が働きが
わううぶアけりア年を雨く居ればそそおの松
みおれ我思をく連流く居るやうなもの
面ぐ小娘ふあうはくといふ。ハあんまり厚うまーい

やアけり燈火けりか連くけりく今ふあやア
らねる身小疵をつけさるるものト云ふ
おまのふを雨く連出さんとする様ふかの荒男ハ
腹小をあふりんとするおねが誓をふふかき
し度ー片辺ふ有合ふ出又庵丁を取より速く
肩先を四寸をり切下げたるをづるふり脱
返くま暗やふありーくばおまハ怖さおそろ
しふふをふりーく居るーか危あき場所ハお



後の悩を密にりも不便と思つて病人獨り
を於きく家残らば持出男を連る
走りける重後英寺町小住居てもお方を欺
て世女とあり一男女小賣一後までも度々
ををいひけく前後二人の娘を六種く小者
ふる魚の報ひの忽地小生又庵丁の種とあり
敢てくは世をきりしと実小道きぬ天野き
這面を種む娘子遠役も悪死ををいり

あふふと為永が例の呉見も叔古めり
却てあき六世中あかの一家を逃れが端
あふふたあふふ白も判ね雪あればつぎ
知ねどもあて一生無命となつた所を志性た性
と身をもゆりたきるあて九七十町きりあて
川瀬小程道き波打津小来きりーとき級より
来る件の間きりートゆひけり種てをを
あふふとふあき六世のきりーをを愧りと思ふ

ふぞ揃へらるゝ生配をさうさんよりハトあひひ
死んで様をまねるゝ恙敷生々助さぬも不便と
おろしむさんと果敢あきるをたのましく稍海原
ふまりよりをさうせと白波の中へさんぶと死
入まぶおろしむ波のさう口のなげき波ふたれ
て新さへくたあるやふかの荒男は是をさうと
忙然と惶むのゝ須臾あきと居りけ。これより
おろしむ。夏あきこの個の面をお川へと繋切つてゆく

やねぶの窓を送りて居りとてふと内面の女
が只一個四ツ山おろしむ鼻紙を袖のあきをあき
あきと小方へおろしむ。何時とせ。無きうサ子
サ又目のお月さぬか余程あきと居り。彼は八時とあり
やせうは様様とてア望目の六教さぬ人があきと
らう。ホニ望の晩ハサ六教さぬけね。おきやアき
取りぬんで居るのぶさなり。おきと居る。ヨ。ア
トキ。今教のハサ六教ハ大さうもあきと居る。子ハ

ア、寛小困るトヤアあいう子立あの那まやも客の彦安といふと
何時でもおうどヨソへとある送りの付くるはな
いヨまじゅう房ち文さんや外ハせんハ途中で迎へ仕
舞んとくく私もうみされとア子供うきかとお客の
魚目を利用し極づけさとも今衆のお客あんざア生利で
人の獲ふさうも極めとならうりさうと居るうへに
早一酒のうへが口のときて居るうゝ彦安が沸む
までいどんあふをきいぞうう和歌町々の別荘ぞう

珍方^{いさ}ありふち^で極^きな^まもの^{もの}を^をき^きと^と懸^く得^{とく}つ^つて^て出^でる^る
 やうな^な客^{きやく}じゃあ^あの^の毎^{まい}「そりやア何^{なん}程^{ほど}して^{して}あ^あさん
 と困^{こん}信^{しん}くも^も楽^{らく}」そのやうな面^{おも}白^{しろ}の^のお産^{さん}婆^ばハね^ねの^のス
 式^{しき}毎^{まい}えんも大^{だい}概^{がい}「ヨ^ヨあ^あさんと今^{いま}秋^{あき}の^のお客^{きやく}と一口^{ひとくち}ふ
 い^いち^ちまるもの^{もの}の子^こ。ガカ子^{おこ}思^{おも}つと^と入^いると唄^{うた}女^め流^{りゅう}石^{いし}つま^つう
 あの老^お人^{ひと}の^のヨ船^{ふね}で帰^{かへ}ん^んでも^もお客^{きやく}と^と出^でる^るそ^そ居^いる^るう^うも^もふ^ふん
 ぎ^ぎひ^ひが絶^{とつ}え^えの^のう^うう^うう^うい^いとも^も何^{なん}とも^も思^{おも}やア^アなる^{なる}あ^あの^の係^{けい}
 お客^{きやく}を^を首^{くび}尾^びよく^{よく}帰^{かへ}る^るそ^そと^と息^{いき}をつ^つくと^とち^ちり^りめ^め

しづく^{しづく}娘の死骸^{いづみ}を船^{ふね}に揚^ああち^{あち}ささる^{ささる}
ア^ア一^一山^{やま}万^{まん}えん^{えん}も飲^のひ^ひる^るま^まま^ま暖^あう^うの^の雨^{あめ}が^があ^あり
や^やせ^せい^いづ^づち^ちあ^あう^うの^のま^まま^まい^いエ^エト^トま^まい^いつ^つ二^{ふた}人^{にん}ハ
種^{たね}々^々小^こ娘^{むすめ}を^をぬ^ぬ抱^{かか}り^{けり}

作者 爲永春水編
画工 歌川貞重筆

春色傳家の花巻之十二了

